

島村・丁・王報告へのコメント

山 泰幸

YAMA Yoshiyuki

総合討論のコメントを担当させていただくことになりました関西学院大学の山泰幸です。主に第3部の3名の先生方のご報告に対するコメントを担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、島村先生のご報告では、「民俗学」成立の世界史的背景から、その学的性格をじつに広い視野から位置づけられたように思います。ここで一つの思い出を紹介したいと思います。2013年の4月から1年間、私はパリで過ごしましたが、ちょうどその年のクリスマスに、島村先生がパリを訪問されました。中年男性2人でワイングラスを傾け、民俗学について語り合いながらクリスマスの夜を過ごしたわけです(笑)。じつは、その場所はパリ大学界隈のカルチュ・ラタン(Quartier latin)とよばれるところです。訳せば、「ラテン語地区」とでもなるでしょうか。かつてヨーロッパ各地から集まった学生たちがラテン語で会話をしていた地区であったことから、この名が付いたようです。正統なる言語(文字言語)、学術言語であるラテン語でもって学問を学ぶために、ヨーロッパ各地から学生たちが集まっていたのです。逆に言えば、学生たちが出身地において、あるいは日常生活において使用していた言語は、「俗語」すなわちヴァナキュラー(vernacular)な言語であったということです。島村先生のご報告にあるように、「民俗学」成立の背景には、正統なる言語に対する、自言語としての「俗語」とそれともなうヴァナキュラーな文化の再発見・再認識があったという世界史的に共通する背景があったのです。このことは、ヨーロッパのみならず、東アジアのコンテクストにおいても当てはまります。漢字・漢文という正統なる言語(文字言語)に対して、それに対抗するかのように自言語意識やそれともなう自文化や自国に対する意識が高まったことが知られています。たとえば、本居宣長らの国学の運動がそれに当たるでしょう。しばしば柳田國男や日本民俗学への本居宣長らの国学の影響が指摘されるのも、世界史的な背景から見れば、故無しとは言えないというわけです。

また、島村先生は「社会変動論」と「生世界」についてそれぞれ興味深い見解を提示されています。気になるのは、両者の関係がどうなっているのかという点です。たとえば、「変動」を捉える時間のモノサシをどこに置くのか、という問題があるかと思います。「生世界」を当事者と研究者の協働によって「内在的に考察」すると述べられていますが、「変動」ということを考慮すると、「内在的—外在的」な考察になるのではと思います。つまり、研究者が当事者の「生世界」の外部の時間のモノサシによって捉えた「変動」と、当事者が「生世界」の内側で捉えた「変動」の双方を視野に入れざるを得ないのではないかという疑問です。この疑問は、結局は、研究者が当事者の「生世界」にどのように関わり得るのかという問いになるかと思います。

最後に「フォークロア」から「ヴァナキュラー」への用語の変更について。変更の理由として、「ヴァナキュラー」概念の妥当性や「フォークロア」という言葉に纏わり付いている意味作用の問題について指摘されていますが、これについては私も賛同したいと思います。もし、そうであるならば、「民俗」という漢語がもっている意味作用から、どのように逃れるのかについても、同じく検討しなくてはならないのではないかと思います。

次に、丁秀珍先生のご報告についてです。フランスのマルクス主義系の社会学者として著名なルフェーヴルの空間論から日常研究への示唆を得ようとする議論として理解いたしました。ここで、ルフェーヴルの議論の時代的・社会的背景を確認しておく、資本主義とこれを背景とした都市政策によって、都市中心部から郊外へ人々が疎外され、本来、人々が平等に享受すべき都市に居住する権利が侵害され、都市における人々の差異（自由）を認めないような状況が生まれており、これに対して人々の平等や自由といった権利を取り戻そうとする主張＝運動の一環として捉えることができます。丁先生のご報告で、まず気になるのは、このようなルフェーヴルの議論を、その時代的・社会的コンテクストを抜きにして、一般化することが可能なのか、また韓国（または日本、中国）の日常研究に具体的にはどのように適用できるのか、という点です。次に、「ローカリティ」という視点についてです。これは「日常」概念を空間論的に読み替えたものと理解できます。ルフェーヴルのいう「空間の表象」「表象の空間」「空間的实践」（これらは理念的に設定されたもので、実際にはつねに相互に影響し合っているものと考えられますが）という空間生産の三元弁証法に対して、「ローカリティ」という視点を媒介とすることで、「日常」概念を空間的实践の場として接続しようとする果敢な試みとして理解できるかと思います。また、空間的实践の向こうには、「差異の空間」「自由」への希求があると思われそうですが、これとは異なる社会的背景を前提にし、正反対とも見える方向性を示している戸曉輝先生や王傑文先生など中国の民俗学との関係をどのように考えればよいかは、今後、議論していくべき大きな課題の一つかと思います。

次に王傑文先生のご報告についてです。これは丁先生のご報告で提示された空間論的パースペクティブに対して、中国での具体的なケースによってコメントしたものと読むことができると思います。特に、「空間の文法学」に対して、「空間の文体学」という言葉使いや、通行人を取り上げた「空間のレトリック」という表現など、空間を言語のメタファーやテキストとして見立てる議論は、個人的に共感するものです。また、セルトーの「戦略」と「戦術」の枠組みを「便宜的」に参照しながら、「道端経営」を捉えています。ここで私が「便宜的」というのは、セルトーの議論が背景とするフランスと中国とは体制が異なり、また「公共」概念も異なっていることを、明確に認識したうえで、セルトーの議論を王先生のご報告では参照されているからです。このような複雑な議論の進め方は、中国ではモダンとポストモダンが交錯しながら同時進行しているという認識から来るものと思われそうです。言い換えれば、「日常」を「西欧」から見るのか、それとも「中国」から見るのか、どこから「日常」を捉えるのかという問題に帰着すると思います。この問題は午前戸曉輝先生のご報告「日常概念の中国問題」とも深く関係する問題と言えます。

以上の3名の先生方の議論には、「『日常』概念の二重性」という問題が共通しているように思います。つまり、理念的・方法的な概念と具体的・現実的な概念とが、「日常」概念の中で同居しているということです。前者の「日常」概念だけに依拠すれば、思弁的な議論に終始することになり、後者だけに依拠すれば、事例の収集に終始することになってしまいうでしょう。そうならないためには、この二重の視点を合わせ持つことが不可欠となります。これは「日常」概念の存在的・存在論的把握と呼んでもいいかと思います。

「日常」概念の二重性を前提とする民俗学の営みは、この二重性の間を往復するという、非常に

緊張を強いられる作業ということになります。この作業は、詰まるところは、理念の実現、すなわち「人びとの生世界をより良いものとする(島村報告)」という意味での実践につながっていくことになるでしょう。むしろ、「日常」概念の二重性を前提とする限り、この二重性の擦り合わせの作業が不可避なものとして課されることになります。その意味で、民俗学はそもそも実践的であらざるを得ないということになるかと思います。この実践をどのように理解し、どのような方向に進めていくかによって、それぞれの民俗学のスタンスもまた決まってくるのではと思います。

私のコメントは、以上となります。ありがとうございました。

本稿は2017年7月に開催された日本民俗学会の国際シンポジウム「何気ない日常／変わりゆく日常」の総合討論に際する山泰幸氏のコメントを文字起ししたものである。内容の性質を考慮し、当日の口頭表現のままここに掲載する(編集委員会)。